

視点1

子どもはみんな「夢中」になる

下田浩太郎

(保育士)

「夢中」と辞書で引いてみる。①夢を見ている間。夢の中。②自覚を失うこと。我を忘れること。③物事に熱中して我を忘れること。「子ども 夢中」と自分の頭の中で辞書を引いてみる。瞳を輝かせる子どもの姿が浮かぶ。そうして見つめるモノの一つに「虫」があった。

悲劇のダンゴムシと職人技

園庭の植木鉢をひっくり返すと、慌てたようにダンゴムシたちがモゾモゾと動きだす。「あー あー」とうれしそうな声を上げて、

一歳児たちがおもむろに手を伸ばす。寝ぼけて逃げ遅れたダンゴムシは子どもたちの餌食となる。ようやく動かせるようになった指先で一生懸命につまもうとするがうまくいかず、それでもあきらめずに何度も挑戦する子どもたち。今、この瞬間の子どもたちの頭の中はダンゴムシ以外ないのだろうと思われる。

ようやく「あー(捕れた)！」と感嘆の声を上げる子どもたちの手の中のダンゴムシは瀕死の状態である。「あーあ、かわいそうに」と言いたい気持ちを抑えつつ、「ダンゴムシさん捕まえられたね」と声を掛けると、満足げな表

下田浩太郎 (しもだこうたろう)

ひらお保育園保育士。都内でも自然豊かな環境の保育園で、笑い声が響き合う保育を目指して実践してきている。全国幼年教育研究協議会集団づくり部会に所属。本稿は前勤務園でのエピソードによるものである。

情で、動かなくなったダンゴムシを捨て、次の獲物を夢中で捕まえ始める。

これが五歳児となるとどうだろう。姿は一変する。ダンゴムシなどは余裕で捕まえ、砂場のカップいっぱいにはウジャウジャと詰め込んで、自慢げに見せにきてくれる。

散歩に出ても行く先々で生き物を捕まえ、「飼う」という発想が生まれる。川遊びに行った際にも、着くなり石をひっくり返し、虫や魚などを探し始める。「これアブラハヤだ。うちにも一匹いる」「これはタイコウチ、これはヤゴ。トンボになるんだよ！」などと得意げに捕まえてはケースに入れて持ち帰る。

お世話も慣れたもので、水槽の掃除ひとつとっても手つきが違う。「砂は一回洗って、グルグルやって、水を捨てて、きれいになってから入れるんだよ」と、砂利を少量ずつに分けてバケツに入れ、中に埋まってしまったカワニナを救出しつつ、米をとぐように慣れた

手つきで洗っていく。その間にもう一人が水槽をスポンジで洗う。「何だ、この職人集団は！」と思わず言いたくなるような手つきと連携。普段は保育者の話も上の空……子どもたちだが、好きなことをやっている時の集中力はこれほどまでに違うものか！と思わせてくれる。

ガキ大将といたずらっ子たち

楽しいことを夢中でやっている時の集中力は、保育者も一緒である。散歩の帰り道に見事なオオカマキリを見つけた瞬間、いたずら心がうずきだす。そこで子どもたちに相談。「ねえ、オオカマキリ持って、日先生（男性保育士）に付けに行かない？」と、保育者としてあるまじき提案。日先生は、カマキリはおろか小さな虫すら苦手なのだ。答えはもちろん、「いいねえ！」……できた子どもたちである。

そうして次々にオオカマキリを見つけて両手に持ち、そそくさと園に帰る。皆、顔はニヤついている。目的を共有する独特の一体感が心地よい。いや、冷静に見ていた子たちもいたかもしれないが、記憶にないということ、その時の保育者の視野には入っていないなかったのだろう。年長児を引き連れ、H先生がいる年中組に向かういたずらガキ大将といたずらつ子たち。

そんなニヤついた集団の姿に、当の本人も何かを察したのか、「なにになに？」と臨戦態勢をとる。「へっへっへっ！ 行けー！」の掛け声で、後ろに隠していたオオカマキリを差し出し、追いかける。夢中で逃げる先生を夢中で追いかけるいたずら集団。カマキリを持っていない子も、実は自分も苦手を持っていない子も、うれしそうに一緒になって追いかける。そこには教育的な意義などない。ただただあふれ出る笑顔と笑い声広がっている（いや、

逃げる人だけは必死の形相だったかもしれない）。

そして、ホールに追い詰め万事休す。目的を達成した集団は、意気揚々とクラスへ戻っていくのだった。その日の給食時の話題がその話だったことは言うまでもない。

楽しければ「夢中」になる

子どもが虫に手を伸ばす時、手を伸ばす理由には子どもの中にある。手指の感覚や機能を育てるために捕まえるのでもなければ、命の大切さを学ぶために捕まえるのでもない。楽しいから、触れてみたいから捕まえるのだ。触れ合っていく中で結果として飼育の仕方や生態などを学ぶことがあるかもしれない。学ばないかもしれない。命の大切さを感じることもあるかもしれない。ないかもしれない。それでいい。それは触れ合う理由ではない。触れ合わせる理由でもない。子どもは学ぶた

めに遊ぶのではなく、遊びたいから遊ぶのだ。「夢中」で遊ぶ。そこには「やらされる」ことから決して得られないものがたくさんある。「夢中」になること自体にすでに大きな意味があるのだ。

時折、「この子は集中できない」などという言葉を耳にする。いや、自分も使ってしまったのかも知れない。でも、本当に集中できない子はいるのであるか。子どもは楽しければいつまでも集中して遊んでいるし、声を掛けられても耳には入らない。続けたくて聞かえていないふりをする時さえある。きつとそうした「集中できない子」の上には「保育者・大人が集中してほしいことに」という言葉が付くのだろう。

子どもも大人も楽しければ「夢中」になる。そして一日中「夢中」になっていられる時期こそ乳幼児期であり、かけがえのない時代なのだ。だからこそ子どもが興味を持った瞬間

を、驚きや発見をした瞬間を見逃さず、寄り添い、共感し、応えていける保育者でありたい。そして、子どもが安心して「夢中」になれるものをどんどん増やしていける、そんな保育を目指していきたいと思う。

おわりに……（ガキ大将の顛末）

H先生を追いかけ回して笑い合った日の夕方、年中組の女の子二人が恥ずかしそうに、でも少し不満げにやって来た。そして、「H先生をいじめないでね」と注意された。もちろん謝ったが、H先生も愛されて保育しているのだなとうれしく思いつつ、この楽しみはやめられないと心の中で思った。反省しない保育者。でも「夢中」になれるからこそ、子どもの「夢中」を大切にできるのだと思うのである。いつまでも「夢中」になれる大人として子どもたちと共に笑い合っていたい。